インド、税関で留め置かれたスコッチウイスキーのコンテナを解放

貿易への圧力は和らぐものの、バルク輸入品に162.5%と75%のどちらの関税が適用されるかをめぐる問題は未解決のままだ

2026年11月24日（火）



インドは11月23日月曜日、バルク輸送品の関税上の扱いをめぐる問題の解決に向けて英国当局と協議する間、税関で留め置かれていたスコッチウイスキーのコンテナを解放すると発表した。

争点は、英国からインドに輸入されるバルクのスコッチウイスキーに実効税率162.5%を適用するのか、それとも両国間の二国間貿易協定がスコッチウイスキーに定める75%の関税を適用するのかという点だ。87.5ポイントの差は、最終的な製品価格を大きく左右しかねないため、輸出入業者にとって大きな問題となっている。

インド政府がコンテナの移動を認めたことは、協定の適用方法を両国が協議する間、貿易の流れへ

の影響を和らげようとニューデリーが動いていることを示している。解放の発表は、すでに国境に到着していた貨物の差し迫った問題には対処したものの、関税をめぐるより広範な問題の最終決着を意味するものではない。

問題の中心にあるのは、税関での品目分類だ。バルクのスコッチウイスキーが、意図された低関税の適用対象から外れる分類を受ければ、この輸入品目に対する関税譲許の実質的な効果は薄れる。そのため、二国間協定によってインド向けスコッチウイスキーの貿易障壁が下がると期待していた企業の間で懸念が高まっている。

インドは輸入ウイスキーの重要市場であり、インドと英国の間の貿易に携わる企業は、この問題を注視している。スコットランドの生産者を含む英国の輸出業者にとって、関税率は極めて重要だ。インドは依然として世界で最も保護主義的な酒類市場の一つであり、関税の扱いがわずかに変わるだけでも、価格設定や需要、供給に関する判断に影響し得る。

11月23日のインド側の発表は、交渉が続く間に問題が商取引を妨げないよう、当局が対応を図っていることをうかがわせた。それでも、問題は未解決のままだった。ロイターが引用した公開情報からは、論争に明確な決着をつける最終的な税関命令は確認できず、当局は解放されたコンテナの総数や貨物の価値も明らかにしなかった。

詳細が明らかになっていないことで、輸入業者には重要な疑問が残る。企業が必要としているのは、すでに解放された貨物の状況だけでなく、今後インドの港に到着するバルクのスコッチウイスキーがどのように査定されるかについての明確な説明だ。正式かつ一貫した解釈が示されなければ、貨物の到着時に適用される関税をめぐる不確実性が続く可能性がある。

今回の問題は、貿易協定でよく見られる課題も浮き彫りにしている。協定上の関税譲許があっても、税関規則や品目分類をめぐる見解が分かれれば、国境でのコスト低下につながるとは限らない。今回の162.5%の実効税率と75%の関税率の差は大きく、輸出業者が確保したと考えていた市場アクセスが実現するかどうかを左右するほどだ。

インドと英国の当局者は、協定の文言と税関での実務上の扱いを整合させようと、この問題について協議を続けている。その協議で明確な解決に至るまでは、コンテナの解放は関税問題が完全に決着した証拠というより、より広範な物流の滞りを防ぐための暫定措置とみられる。